

## K男の変身

松井 とし



ある幼稚園の園内研究会で、他の幼児をこわがり、担任と離れられない四歳児K男のことが話題の中心となった。若い担任の先生は、ひとりっ子で、同年齢の子どもと遊んだ経験もなく入園してきたK男の不安な気持ちを受け入れ、かかわっていた。いろいろな場面でエピソードが話された中で興味深かったのは、ふとしたことから始まった「お店やさんごっこ」の中で、K男がそれまでとは違う、自立した一面をみせたという話だった。

六月下旬のある日、それぞれ好きな遊びを楽しんでいる時に保育室の中にいたその先生は、廊下にいた子どもと目が合った。窓に近づき向かい合うと、お店のカウンターみたいと感じ、思わず「いらっしやいませ」と声をかけた。子どもは驚いたようだったが、次の瞬間、表情がパッと輝き「アイスクリームください」と言った。「ソフトクリームと棒のアイスとどちらにしますか?」「ソフトにします」。近くにあった紙にソフトクリームの絵

を描いて渡すと、子どもはお金を出す動作をする。このやり取りを見て誰からともなくお店やさんの前に並び列ができ、気が付くとK男も自分から並んでいた。「いらっしやいませ」「あの、いちごのついたゼリーをください」「はい、ちよっとおまち下さい」「はい」「おまちどおさま。百円です」K男、ポケットからお金を出す仕草をする。「ありがとうございます」「もうひとつ、チョコのアイスをください」「すみませんが、たくさんお客さんが待っていますので、一人ひとつになっています。もう一度並んで買って下さい」「ああ、そうですか」K男は再び列の後ろに並んだ。

この出来事をふりかえる先生の言葉。「散歩やクラス単位で移動する時は、列に入らず友だちに触れられるのも嫌がるK男。いつも教師の隣にいるK男が、自分から混雑した列に入って並んだことに驚き、嬉しく思った。K男の番がきた時は『K君。一人で並べてえなかったね』と声をかけようか大いに迷ったが、遊びの流れに影響すると思い、やめた。K男が『もうひとつください』と言った時も特別に売ろうかと思ったが、結局は断わった。納得してもう一度並んでK男が、まるで別人のようだった」

K男を包みこみ、緊張したふだんの生活から解き放した「お店やさんごっこ」の世界。その始まり方のセンスと、あくまでも店の人を演じ続けた若い先生の感性に乾杯！

(元幼稚園教諭)